

一九七二年の幼児教育に望む

揺ゆり籃かごの心



千 谷 七 郎

湖上をすべり行く帆船、風にそよぐこずえや、舞い落ちる木の葉、空行く雲の姿など、何かに動かされている姿に魅せられているとき、私共をとらえることのある感情は詩歌に数限りなく詠われている。このような感情は心が深く動かされていることの徴候であるが、もしこのような感情も追憶の霧に見失っている人でも、以下のようなさまざまな運動を比較して見られるなら、このことをしっかりとらえることができるだろう。

さざなみの立つ池、風に揺れる稲穂の波などは上述の例に親縁であろうし、行く川の水の流れはやや近い。豪雨とか、たぎり落ちる滝水の現象となれば少しばかり力動的になるし、夜空

を渡る雁の列はもっと力動的であり、疾走するかもしれない群れの現象は圧倒的に力動的となり、短距離疾走者となれば完全に力動的現象である。ついに、投げられた石、蛇口からほとばしり出る水、すべての機械の運動現象に及ぶと、その程度はさまざまであるにしても、力学的解釈を要請せざるをえなくなる。この最後にあげた運動力学に比べれば、其の他の運動の姿は、虚心に見ればことごとく疑いなく生命적이다。それも特に情性的に生きている姿であるが、しかし完全に欲動推進のない動きにおかれているという、全く独特の意味で心ある姿である。このように述べると、私共の内部に思い当たるものがあるだろ

う。それは、およそ考えうるかぎり一番深い受動性におかれていて、たとえば激情的にかりたてられた運動に突込むような反応的索引などは全くなくて、しかも終始生々と動かされている情態である。これは動物の逃走、襲撃、餌探し、交尾等の衝動にかられた、いわゆる刺激感覚に呼応する力動的運動と異なつて、諸形姿から直接に心を動かされる被動性、やがて意識に上れば深い感動として告げられるものであるので、ある内的被動性の現実を考えないではおけないであらう。

さて、この被動性のえん源は力動性のそれよりも早期に、文字通り揺籃期にあると思われる。泣き叫ぶ子を揺すぶつて静めたり、おさまつてくると揺籃で寝つかせることは、ほとんどの民族が知りつくしている。さらに、へそのおを切つた刹那から、あるいは直後ではないにしても間もなく、人間は歩き出すのではなく、「運ばれて」いること、そしてこのことが上述のことと同じ効果をもたらしていることを考えてみるなら、乳児が動かされながら体験しているものは、その後展開する人間の心の黎明であることである。そして動物から区別される人間の心を特徴づけるものは、形象を受容する心の情性が肉体の刺激感覺的力動に優勢する点にあるとすれば、このことは次の事実によつても驚くほどにその真が確かめられるだらう。それは動物に

はその例を見いだせないほどの、人間の子どもの長い未成年期は、本質的に見れば、ひとり歩きできない期間に一致していることである。その間は、ひとり歩きではなくて——場所での刺激感覺的力動はいわば包み込みにされて——運ばれることが全く主たる体験となつている。特にこの点に、冒頭に提出したような感性的諸形象に動かされる人間特有の個体発生があるのであり、実は一切の「人間性」の根柢の一つをなすものである。

「交通機関」の意味は除いて、一切の乗物による楽しみ、それは成人にまで及ぶが、車、汽車、船、飛行機、あるいは馬、スキー、スケート、さてはメリーゴーランド等にいたるまでの楽しみを想起するなら、それらはやがて平均台からぶらんこを経て、真直ぐに揺籃の乳児の無意識の楽しみにつながるだらう。それは「生起の流れ」と一つになることである、とだけ述べておく。

半世紀前までは国内の何処でも見られた揺籃も、現代では次第になくなりかけているようだ。それも乳幼児をゆらゆらさせることは非合理であると非難されているからであるとすれば、こんな「進歩的思想」は、それと知らないままにロゴス中心的教育法をかりて、生命の完全な無力化、人間の機械部品化への道を進んでいる症候と見られるだらう。

ルトトヴィヒ・クラীগスがボーデの「リズムと体育」の書に言及している箇所がある。「ボーデが原初の、特にアジアの舞踊の重点は『運動を造り出すこと』にあるのでなくて、できるだけ完全に『運動を消す』ところにある、とあえて逆説的表現を辞さなかった事情は、現代ヨーロッパ人を警醒するに足る。現代ヨーロッパ人はアクロバットの跳躍をこととする芸術舞踊のために雅趣を枯渇させ、原初の舞踊の真髄を見る眼を失ったのだから。ボーデが述べていることは、運動を生起の中に取り戻すことであつた」と。

寝たうちを子ども起こすな夕涼 其角

——周郷先生のご紹介で、千谷七郎先生（東京女子医科大学神経精神科教授）にご執筆をいただきました。

原稿をいただきに学校の方へ参りました折、先生は「幼児教育のことはわからないので」とおっしゃりながら、お話をうかがうと、中教審の答申に関係した会合にもたびたび出席され、幼児教育にはなかなか関心をおもちのごようすでした。そして、現代の教育全般にかけている情操面は、決してロマンチズムとかたづけしてしまつていいものではないことを強調してお話し

くださいました。また、語学にしても、しゃべるための実用的な外国語は知つていても、原書を読む力が、このごろの学生にはないというお話は、やはり現代の教育の弱点をついていらつしやるようで、大変興味深く、もつともつとお話をうかがいたいと心をあとに残しながら、失礼いたしました。（赤間）

